出る杭研究　イヌ飼育がヒトに与える影響-個人から地域へ-

吉田瑠琉・永澤美保・茂木一孝・今野晃嗣・石原淳子・小手森綾香・菊水健史

研究の背景と目的

◇個人の解析
【背景】飼い主が他のイヌと出会った際に、中型犬の飼い主は同種のイヌとの交流をより多く許可している。(McNicholas&Collis,2005)
【目的】生活環境と犬種が、飼い主の協力性に与える影響を構造方程式モデリングを用いて明らかにする。

◇地域の解析
【背景】これまでの研究はイヌの飼育者という「個人レベル」の分析にとどまり、「地域レベル」での関連は十分に検討されていない。
【目的】イヌ飼育に関するサービス業の充実度やイヌの飼育率がWell-beingに関連するのか、イヌの飼育率と関連する地域の環境とは何かを明らかにする。

研究・調査方法

◇個人
データ：多種ペット比較調査(アンケート調査)
回答人数：5574人(男性 3697人　女性 1813人　年齢 16～87歳)
解析項目：収入、居住形態(持ち家、賃貸など)、犬種、協調性、社会的価値志向性(SVO)など

◇地域
データ収集：
・神奈川県における市区町村別社会・イヌ関連データ (ペットショップ・サロン、動物病院、Dog cafeなど)→各自治体公表データや公式サイト
・Well-being指標・都市・社会関係に関する指標(主成分分析実施)→デジタル庁オープンデータ

結果と考察

◇個人

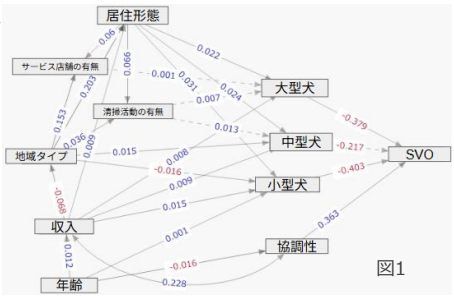

図1

・犬種やイヌ飼育の有無は社会的価値志向性(SVO)に負の影響を示した。一方で生活環境、協調性は正の影響を示した。(図1)
・モデル適合度は生活環境とSVOが相対的に最も良好な適合度を示した。
➡SVOはイヌ飼育要因よりも生活環境や個人特性によって説明される可能性が高い。

◇地域

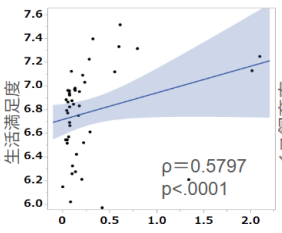

図2

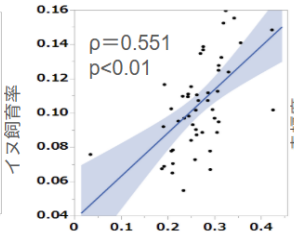

図3

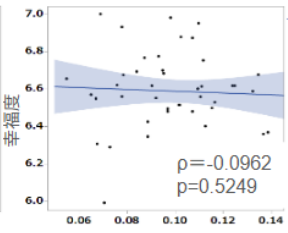

図4

・Dog caféはWell-beingのうちの生活満足度と正の相関を示した。(図2)
・イヌ飼育率は高齢者割合が高い地域で高い傾向がみられた。(図3)
・イヌ飼育率とWell-beingには有意な相関は見られなかった。(図4)

これから

・相関分析であるため因果関係は明らかではない。そのため媒介モデルなどを用いて因果関係を検証する必要がある。今後は仮説を立てて、モデルの構造化を行う。